説明的文章　段落の要点・関係の捉え方

A　言語行動に用いられる言語記号には、キチンとした〈きまり〉があって、それに従わない勝手な記号を作り出して使うわけにはいかない。――一天にわかにかきくもってものすごい雷鳴がする。それを人に告げる場合、「雷がゴロゴロ鳴ってきた」と言っただけでは、何だか感じが出なくてものたりない。と思っても、自分ひとりで、「ガビダリ」というような記号を発明して、「ガビダリが……」と言ったりしたら、相手にはぜんぜん通じない。そこで、いっそうイキイキと感じを出すためにはどうするか。――〔カミナリ〕の〔カ〕のあたりに力を入れて、少し口の開きをせばめ加減に、〔ケ〕に近いような音にして発音してみると、いかにも《雷はいやなもの》という感じが出る。あるいは、〔ゴロゴロ〕の〔ゴ〕に力をこめて、少し引伸ばし気味に〔ゴーロゴロ〕と言ってみると、今度は、雷鳴のようすがよく伝わるようになる。（中略）

B　こんなぐあいで、記号を発明するのは無理だが、すでに通用している記号の中から適当なものを選び出す・それを組合わせる・それに加えて音声の出しかたを工夫する・補助的な動作をあわせて行う、……というように、〈言語行動のしかた〉に工夫をこらすことはできる。その工夫がうまいかまずいかによって、自分の意図するとおりの効果があがったり、あがらなかったりする。すなわち、言語行動には、記号の〈きまり〉のわくからはずれない範囲で、行動を有効に達成するために〈技術〉を加えることができる。

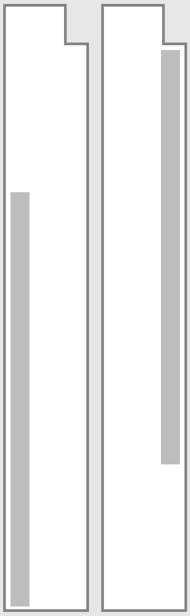
C　野球のバッターは、バッター・ボックスに入って、ピッチャーの球を打たなければならない。オレはもっと一塁ベースに近いところで打つんだ、などというわがままは許されない。これは野球の〈きまり〉である。が、バットの根本から何センチのところをにぎってかまえろ、とか、どんなふうに飛んでくる球を打て、とかいうようなルールはない。それは、バッターが工夫研究してみがくべき〈技術〉の問題である。コトバの場合も、きまりと技術とは、似たような関係にある。

（金田一春彦『話し言葉の技術』講談社 による。一部表記を変えた箇所がある）

段落の要点・関係

各段落の**要点**（中心となる内容）を捉えるには、次のような箇所・表現に注目するとよい。

・各段落の初めや終わり。



・「まとめ」や「筆者の意見」を表す文。

（例）つまり、……。　このように、……。

……と思う。　……べきだ。

各段落の要点や、段落の冒頭の接続語などに注目すると、段落どうしの関係がわかりやすくなる。

例題

本文のAとBの段落の関係について、正しく述べたものを選びなさい。

ア　Aで示した内容について、Bでは根拠を述べている。

イ　Aで示した一般的な意見に対して、Bで反論している。

ウ　Aで示した要点に補足する内容を、Bで提示している。

〔　　〕

確認テスト　本文を読んで、問いに答えなさい。

(1)　Cの段落の内容を正しく述べたものを選びなさい。

ア　Bで述べたことをまとめ、結論と筆者の主張を簡潔に提示している。

イ　Bで示した内容について、たとえを用いてわかりやすく説明している。

ウ　Bに対して、別の事例を出すことで言語行動の特殊さを示している。

〔　　〕

(2)　――線部「コトバの場合も、きまりと技術とは、似たような関係にある」とあるが、本文中に示されている次の例のうち、言葉における技術に当たるのはどちらか。適当なものを選びなさい。

ア　雷に対して、それまでに通用していない「ガビダリ」という記号を発明する。

イ　雷の［カ］のあたりに力を入れ、［ケ］に近いような音にして発音してみる。

〔　　〕